

「戦争を聞かされた思い出」

東田すみ子

お婆の二男こと戦争に出され、毎日、口癖の中、目には涙。私はその話を聞かたび、いやいや聞いてすごした。

冬の雪の寒い日、皆で船が舞鶴に着くと人のうわさで聞き、福知山行きの汽車に乗り岸壁まで行き、船から人々の降りる時、おじも、おばも、今日も船に乗っていないか、息子の名前を叫びながら悲しい時でした。私もまだ2歳か、そんな時のこと、日が過ぎ二男は帰りの船に乗っていたのに、マラリヤになり、亡くなったと後でわかりました。

毎日家に帰れば、空襲の音、家は黒くローソクの明かりを消し震える毎日。三男はシベリアへ捕虜になり、シベリアで鉄道の仕事、地名は「チタ」と言っておりました。私もおじにみせてもらった物、スプーン、自分で作ったコップを見ました。食事もままならない日、食べ物は「黒いパン」。おいしくなくても口に入れて、仕事につき、身体の弱い人達は、「水、水をくれ」と叫びその場で息絶えたと聞き胸が痛かったです。おじさんは、日本に帰って、ひまな時に、自分たちの友を思い、仏像を彫って弔っていました。一体はロシアの人に届けてもらい、草ばの中で自分の心を皆に分け合いました。と話を聞いている時、自分が今、ここに生かさせていること、自分の尿を飲んでいてことなど…。

今まさに、ウクライナとロシアの戦争、終わりになって平和の日を私は見たいのです。